実践記録から
―盲人のこと―

松村康平

もう三年ほど前になるが、私は盲人会館で、社会科の授業を担当したことがある。東京・新宿区の戸山ケ原にあるヘレン・ケラー財団の仕事の一端を引受けたわけで、受待つたのは、高等学校一年にあたる組だつた。

私は、それまでにほとんど盲人にふれたことがなかつた。だから、こちらが善意で一生けん命に話しても、意図の通じぬおそれがある。そればかりか、間違つて悪意にとられる危険も感じられた。それで、最初の時間に、「どんなことがいやか」「どんなことにこまるか」卒直に意見をきかせてほしい、と、申しでた。

その時、一人の青年が立つて、「めくら」といわれるのが「いやだ」と答えた。この青年は、大学在学中に応召して失明し、今は、はり・きゅう師の免許状をとるために、勉強しているのである。

「めくらといわれるのは、ちようど、あなたたちが、めあきといわれて気待が悪いのと同じなのだ」という。そして、「盲人」と呼んでほしい。眼あきのことを、私たちは「せいがん者」という。そう呼ぶのがふさわしいと思うと、つけ加えた。「せいがん」とは「晴眼」のことである。もし、そのときに、なにも「めあき」といわれたつて、いやな気待などしないと、答えていたら、恐らく私は、彼らから遠い存在になつてしまつたことだらう。

この提案には、いろいろの解釈をくだすことができる。これは、盲人が正常者に対して抱く劣等感のあらわれと、とれないこともない。けれど、「批判」や「解釈」をくだすまえに、私たちは、その世界に身をおき、その世界での出来ごとを、あたりまえだと感じる必要があるだろう。

「富士山はどういうところか」という質問に、縁日のようににぎやかなところと、こたえたものがいた。「滝」について思い浮ぶ色は、私たちだと、多くの場合「白」だが、盲人では、滝の音が漠然としてとらえにくいところから、「黒」に近い感じで抱かれることがあるらしい。講義の中で、「あそこ」とか「そこ」とか「ここ」とかいう言葉は、なるべく使わないでほしいという要求もでた。

職業興味調査をしたときのことである。「好き」「嫌い」のどちらかの極に答が集中して、「中間」や「あいまいな答」が少かつた。盲人の世界では、事ごとに自分ではつきりと決定をだしながら進まねばならぬ機会が、多いからではないかと思う。どことなく「硬い」感じを与えたり、「がんこだ」と思われがちなのも、こうしたところから由来するのではないだろうか。

むずかしい適性検査を通過して大学に在学する二十人ほどの学生と、しばしば談合したが、盲人の生きる道を、新しく開拓しようとしている人たちであるだけ、すじがねが通つて、しつ

かりしている。しかし、私たちがポケットにいれて持ち運べる英和辞典を、点字で印刷すると、床から天井にとどくほどの冊数になり、手軽に利用することができない。教科書も参考書も点釈されているものは極めて少ないため、「きいて学ぶ」方法によつて補わねばならない。それには、「読んできかせてくれる人」が必要になる。幸い、私の身近かに、女子短大生で、リーディング・サービスを進んで引受ける人たちがいて、要求の一端をみたすことができたが、いろいろと、自分の力だけでは処理できにくい問題に、取りかこまれている。手助けをしてくれる人が、いつもいるわけではないから、単語一つきく場合にも、真剣な態度でのぞまざるをえない。忘れたらまた辞書をみればよいといつた気楽さが、ないのである。

盲人に接してから、私は二つのことを考えた。一つは、リーディング・サービスのグループをつくることである。もう一つは、機械の改良である。

点釈の仕事は、篤志家によつて続けられ、盲人図書館の充実がはかられているが、この仕事には、多くの時間と労力がかかり、その割に成果があがらない。点釈をするには、先ず、六つの点からなる点字をおぼえ、その裏がえし文字を紙におしていく。これが、もし、タイプライターに組まれ、打つほう（キイ）は、私たちの使いなれている「字」にし、打ち出されるのを「点字」にすれば、今よりもつと能率的で、思いついた人がすぐ誰でも点釈の仕事は取りかかれることになる。こうした機械の改良から、盲人の世界をより明るくしたいと考えて、意見をのべ、業者に仂きかけているが、まだ実現の運びになつていない。

リーディング・サービス・グループのほうは、それまでにあつたグループとも連絡をとり、現に活動している。活動を開始してから三年、彼女たちは、このグループを「だるま会」と呼んでいる。

盲幼児に接する機会がきたら、新しい玩具を考案しようと思つている。

増子とし編著

親と子のたのしいホームゲームとやさしいフォークダンス

面白い団らんのホームゲーム、軽やかなフォークダンス、一度覚えればひとりでに口ずさむリクリエーションの歌は幼児達を純真健全に成長させる一つの指針を与えるものであります。

B5判　一四〇頁　定価四〇〇円　〒四〇円

賀来琢磨先生著

実用保育動きのリズム（第一集 第二集）

保育遊戯としての動きのリズムの実際について種々の幼児向音楽に振付をした書。

B5判　各二三〇円　〒各一六円

株式会社　フレーベル館